或 問　WAKUMON 127
No. 6 (2003) pp. 127～132

近代漢字語研究の新機運

韓国ソウル：「漢字文化圏における近代語の成立と交流」研究会

沈　国威

第 5 号でお知らせしたように、3 月 21 日、韓国ソウルの祥明大学校大学にて、「漢字文化圏における近代語の成立と交流」と題する研究会が開催された。地元韓国の方に暖かく迎えられ、日本、中国、台湾からの研究者が多数参加した。研究会のプログラムは下記の通りである。

開会の挨拶：李漢燮（高麗大学）

●午前の部

研究発表（研究発表時間各25分、質疑応答10分）

1. 19世紀中国語の新音訳語における表記変遷モデルについて——西洋人の人名表記という側面から　千葉謙悟（早稲田大大学院）
2. 韓国近代文献における外国地名の異表記　金敬鎬（光州大）

以上司会：荒川清秀（愛知大学）

3. 朱鵬（天理大学）：漢字の表音化問題と日中韓文化交流
4. 舒志田（上海同濟大学）：『性学粗述』の語彙と日本の近代漢語

以上司会：沈国威（関西大学）

● 午後の部

講演

5. 言語の接触と干渉、そして抵抗——開化期の日本語に対する韓国語の場合
、宋敏（国民大学校・名誉教授）：

研究発表（研究発表時間各25分、質疑応答10分）

6. 台湾の流行語となった新漢語　王敏東（台湾銘伝大学）：
7. 黒船を取り巻く漢文の世界　陶徳民（関西大学）：

以上司会：金敬鎬（湖南大学校）

8. 文系の用語と理系の用語——その構造の比較　高野繁男（神奈川大学）：
9. 韓国開化期における近代漢語の受容について——経済・汽車・窮理を中心に

崔瓊玉（漢陽大学校）：

10. 在華宣教師の植物学用語はなぜ消えたのか　朱京偉（北京外国語大学）：

以上司会：陳力衛（目白大学）

11. 閉会の辞：沈国威（関西大学）

翌日に韓国日本語学会全国大会を控えることもあって、研究会には 100 名を越す参加者を得、なかなかの盛会であった。この度の国を跨る研究会の成功は、ひとえに高麗大学の李漢燮先生のご尽力によるものである。厳しい条件の中で助成金を獲得されて、中国から朱京偉氏、舒志田氏を招くことができた。また李先生ゼミの大院生の皆さんは、事前準備、外国研究者の送り迎え、会場宿舎の手配、当日の受付などで、奔走された。なお韓国日本語学会からも多大なご支援を賜った。李先生をはじめ、韓国の方々に心から感謝の意を表したい。

プログラムからも分かるように、研究会は近代新語・訳語の形成と交流というテーマをめぐって、多方面にわたる発表が行われた。ここで簡単に紹介したいと思う。

中国からの発表者、舒志田、朱京偉両氏はいずれも具体的な訳語問題を取り上げた。詳細な考証によって、訳語の考案と、それをめぐる交流を丹念に跡づけようとした。舒氏の発表は、幕末期に日本→中国への訳語移動の有無について一石を投じた。朱京偉氏の訳語の交替要因に関する分析も興味深い。

韓国の研究者を見れば、講演を引き受けられた宋敏氏は、最も早く近代語交流の問題を取り上げた研究者の一人である。今度の発表では、氏は、教科書、翻訳書を丹念に調べ上げ、近代の漢字語が日本書を通じて朝鮮語にとけ込んでいく過程を再現しようとした。氏は、この過程を「抵抗」という用語で捉えようとした。氏の「抵抗」は、在来語と外来語の競合現象を指していると思われるが、韓国の研究者の手により「抵抗」から普及・定着へと種々の事実が明らかになっていくであろう。ほかの 2 名の発表も示唆に富む問題提起があった。

その他に陶徳民氏は、幕末期の学問言語としての漢語は同時に国際語であることを論じ、朱鵬氏は、漢字の発音表示の努力を日中文化交流の背景において考察した。また王敏東氏の発表は、現在進行中の日中語彙接触を記述しようとするものである。

漢字文化圏における近代語の成立と交流をテーマとする研究会は、東京 2001、北京 2002 に続いて、今回は第 3 回となる。西学東漸・言語接触、及び漢字文化圏における近代語形成の諸問題を解明するには、日中韓 3 国の研究者の協力が不可欠である。これまでに研究者間の交流は必ずしも十分とは言えない。特に韓国の研究者の研究成果に接する機会が少なかったように思われる（言語の壁もあるが）。今回のような研究会は今後も引き続き開催し、交流を深め、この分野の研究を発展させていくことは、研究会参加者全員の願いである。

次回の研究会は、2004 年 3 月中旬、関西大学にて開催する方向で準備を進めている。情報資源を迅速かつ最大限に共有するために、メーリングリスト［NEW-WORDS］を立ち上

げた。研究会の時期、内容、発表者募集等について随時メーリングリストを通じて情報を交換したいと思う。興味のある方は、ぜひメーリングリストに参加してください。

◎投稿アドレス: NEW-WORDS@egroups.co.jp
◎グループへの参加（自動処理）: NEW-WORDS-subscribe@egroups.co.jp
◎グループからの退会（自動処理）: NEW-WORDS-unsubscribe@egroups.co.jp
◎グループオーナーの連絡先: NEW-WORDS-owner@egroups.co.jp
◎グループのURL: Http://www.egroups.co.jp/group/NEW-WORDS

なお、筆者の手元に残っている発表要旨を以下に掲載させていただく。研究会の一端を知っていただければ幸いである。

【発表要旨】(1)

19 世紀中国語の新音訳語における表記変遷モデルについて
——西洋人の人名表記という側面から　千葉謙悟

本発表では 19 世紀中国語における「新音訳語」に焦点を当ててその成立過程を検証し、その要因としての対音の重要性を指摘する。具体的には、ワシントン（華盛頓）・ナポレオン（拿破侖）の表記の変遷を分析して、表記が 1850 年代にほぼ固定されていることを指摘する。これには音訳語の基礎方言が広州方言から別の方言へシフトした、「表記シフト」なる現象が関係している。

「表記シフト」が発生した重要な原因の一つとして、本発表では広州方言が音訳語に対して持っていた影響力の喪失を挙げる。鴉片戦争以前には広州が対外貿易の唯一の窓口であり、英語の学習も広州の人々が生活のために広州方言で行われていた。しかし開港後には英語を学習するため用いられる方言が、広州方言から上海方言および官話へと変化していったのである。これは海外貿易の中心地が広州から上海へ移動する過程と軌を一にする。ここから、本発表では音訳語がもとづいた方言の変遷モデルとして、従来感覚的に考えられていたような広州方言→上海方言→官話という直線的なモデルではなく、1850 年代にまず広州方言が音訳語の基礎方言としての地位を喪失し、以後は上海方言と官話が主導権を争ったという新しいモデルを提案する。

(2)　『性学粗述』の語彙と日本の近代漢語——『医学原始』を仲立ちとして
舒　志田

中国初期洋学書のうち、一部自然科学関係書を除き、宗教関係書物の多くはその性格上、長期に渡って、日本への持込が禁止されていたため、その語彙が日本語に影響を及ぼす時期

もほとんど 1853 年のペリー来航による開国以降になると考えられざるをえなかった。しかし、中では、『性学粗述』（1623 年成る、1646 年刊）のように、その内容の一部が中国人の手になる著述に引用され、それで割に早い時期に日本語に影響を及ぼしたケースもある。ご存知のように、鎖国時代の当時は、『天経或問』『物理小識』などのような中国人の手になる乙類洋学関係書は比較的に日本に入りやすかった。

『性学粗述』はアレニー（Aleni、艾儒略 1582-1649、1613 年来華）の著作、全八巻、巻一・巻二だけは霊魂論などといった宗教関係内容であるが、残りの六巻はほとんど医学関係の知識である。本書の日本における流布本は 1873 年の上海慈母堂重刊本（青山、聖心、東洋、九大に所蔵）である。しかし、『性学粗述』の内容を多く引用した『医学原始』（1688 年自序、1692 年刊）が大槻玄沢の『重訂解体新書』（1798 年なる、1826 年刊）などに利用されていることから、日本では明治以前に『性学粗述』の受容が『医学原始』を仲立ちとして行われたと言えよう。

性学粗述	⇒	医学原始	⇒	重訂解体新書
（甲類中国洋学資料）		（乙類中国洋学資料）		（日本洋学資料）

（3） 清末宣教師の植物学用語はなぜ消えたか——用語調査のデータから見た場合

朱 京偉

『植物学』（1858）が，西洋の近代植物学を初めて中国に紹介した漢訳洋書である。『植物学』が出版されてからも，在華宣教師は，積極的に近代植物学を中国に紹介しようとした。その過程において，多くの訳語が考案された。しかい，20 世紀に入り，留日学生の日本書翻訳が始まると，在華宣教師の用語のほとんどが日本製の植物学用語に取って代わられた。宣教師が使用した植物学の用語がなぜ消えたか。本発表は，用語調査の結果に基づいて，この原因を探ろうとする。

1.対象資料と用語調査の結果

『植物学』（1858）から 19 世紀末までの間に，植物学関係の漢訳洋学書として，次の諸文献があげられる。

○「論植物学」（『格致略論』に所収），傅蘭雅（J.Fryer）訳『格致彙編』第 9 巻，1976.10

○「論所植之物」（『化学衛生論』に所収）傅蘭雅訳『格致彙編』第 3～4 巻，1880.4～5

○『西薬大成』傅蘭雅口訳，趙元益筆述，江南製造局翻訳館出版，1884

○『植物学啓蒙』艾約瑟（J.Edkins）訳，総税務司出版，1886

○『植物図説』傅蘭雅訳，益智書会出版，1895

○「格致初桄」訳者不詳，『格致新報』1898.8～10

各文献から抽出した用語全体の様子がわかるように，次の一覧表の形で示す。

文献名・刊行順	『植物学』由来の語	典拠無しの新語	文献別抽出語数
論植物学（1876）	8（42.1%）	11（57.9%）	19
論所植之物（1880）	2（16.7%）	10（83.3%）	12
西薬大成（1884）	32（40.0%）	48（60.0%）	80
植物学啓蒙（1886）	38（38.8%）	60（61.2%）	98
植物図説（1895）	34（15.5%）	186（84.5%）	220
格致初_（1898）	8（30.8%）	18（69.2%）	26
延べ語数合計	122（27.3%）	333（72.7%）	455

2.　宣教師の用語が消えた原因について

来華宣教師が考案した植物学用語がなぜ短い期間でほとんど消えたのか，その理由について，内部要因と外部要因を上げることができる。

2.1　内部要因について

内部要因とは，専門語の語基・語形・語群（用語グループ）・語義など，語構成に関する諸要素をさす。この場合，宣教師の用語に代わって中国語に定着した日本製用語との比較は不可欠である。

（1）用語グループの種類：日本製用語と宣教師用語にはともに同じ語構成による用語グループが存在している。また，一方にあって他方にないという用語グループがずれる現象も，日中双方の間だけでなく，清末宣教師同士の間でも見られる。しかし全体的に見れば，日本製用語に比べて，宣教師用語に見られる用語グループの種類は比較的多いのに対し，各用語グループの平均語数は比較的少ないという傾向が指摘できる。

（2）語基の種類：個々の用語の構成要素を見れば，宣教師用語に見られる語基の種類は，日本製用語に比べて多くなっている。なぜなら，宣教師の用語には，中国語特有の語基が存在しているからである。

（3）語基の一義性：艾約瑟の用語にある「～質」と「～胞」が後接する用語グループは，みな同じ構成パターンでできているとはいえ，語義を検討すれば，語基「質」には，「～の性質」と「～の物質」という 2 通りの意味が含まれている。また，語基「胞」は，他の語基との組み合わせによって「～の細胞」または「～の組織」という 2 通りの解釈が可能である。

（4）一字語中心の概念表出：明治以降の日本製用語は，すでに，漢字二字による造語が主流になっていた。これに対して，宣教師の用語は，いまだに一字語中心の造語法から脱皮しきれていないようである。例えば，「細胞」の意を表すのに，傅蘭雅は「膛」という一字語を用いている。これを中心に，「小膛」「膛質」「小膛質」「膛心」「花心膛」「膛織質」「膛成植物」などの語を造り出している。

2.2　外部要因について

外部要因とは，宣教師の植物学用語をめぐる人的，物的，そして背景的な諸要素をさす。これについて，筆者は次の諸点に考え付いている。

（1）宣教師は植物学の専門家ではない：彼らは幅広い翻訳をこなした口訳者に過ぎない。彼らの仕事を助け，訳語の創出に関わった中国人の協力者にも，植物学に通じる人がいなかった。

（2）宣教師同士の交流がない：宣教師の翻訳作業は別々に行われていて，他人の訳書を参照したり，用語を取り入れたりすることはたいへん少なかった。

（3）宣教師の訳書は入門書が中心：清末宣教師が翻訳した植物学書は，いずれも初級の入門書で，内容にも統一性がなかったので，これによって，西洋の植物学が体系的に移入されたとはいえない。

（4）留日学生は最初の専門家である：彼らの日本書翻訳は，専門知識に支えられて，しかも多人数で行われていたので，近代植物学の体系的な中国移入は，初めて可能になった。

研究会会場